

無人島にいだんだ子どもたち

宮内 正 民

国立室戸少年自然の家では、昨年七月に六日間にわたる「無人島にいだむ少年のつどい」を開催した。私はその引率者として、

男女三十二名の少年たちと徳島県牟岐町の沖合にある無人島で生活をした。この催しは、少年たちに無人島で、できるだけ非日常的で、原始的、創造的な体験をさせることによって、不自由な生活の中でがんばりぬく精神力や、自然と人間のつきあい方の基本を身につけさせたいというねらいをもったものであった。対象は小学校五年生から中学校三年生までの男女で、七十名を越す参加希望者があったが三十二名に限定して参加させた。

まず少年たちは、国立室戸少年自然の家で一泊して準備を整えたのち、少年自然の家の練習艇「くろしお」(十二トン)に乗って、島に渡った。「大島」は海上約八キロの沖合にあり、周囲七・五キロの岩場の多い島で、ここには港がないので、入江の砂浜に

船を乗り上げて、まるで敵前上陸のように、ゴムボートを使った、泳いだりして荷物を降した。こんなことは予想もしていなかったが、みんながずぶぬれになって上陸する姿を見て、これほどの意気込みがあれば成功するに違いないと思った。

上陸が終ると予定通りテント設営などの仕事に取りかかったが、入江が狭く、子どもたちのほとんどが、キャンプ経験がなかったことや、暑さと蚊に悩まされ、おまけに予想外のマムシまで出てきて仕事はたいへん苦しかった。特にマムシは、テントのそばにも出没し神経を使ったが、マムシのことを子どもにも知らせてやるよい機会なので、生きたままのマムシを目の前に見せながら、その特徴を詳しく話してやったりした。結局五日間で三匹のマムシをとったが、これらのマムシは海賊料理の材料となって、逆に子どもたちに食べられるという始末になった。無人島の生活

で子どもたちはここまでたくましくなったのである。

上陸のとき、まっ先に海に飛び込んだM君などは、家に帰ってからママシを食ったことを近所に自慢して歩いたそうで、苦笑したものである。またM君は、性格的に弱く一人で寝ることができないので、両親が心配していたのであるが、かれが無人島から帰ってくると一人で平気で寝るようになったというのである。これは無人島の生活が、かれに自信を与え、たくましくしたにちがいない。

女子はさすがにママシの騒動に関しては、気持が悪かったようである。しかし、その女子たちも、木深い山がすぐ海にせまっている全く自然のままの大島での生活で、いささか野生化したようである。野性悪魔レンジャーとかいって山の上からよくウォー、ウォーと叫ぶのがたびたび聞えてきた。

考えてみれば、食事は大なべの煮物を、ボートのオールでかきまぜて作るような生活である。また木立の中に手作りした便所も海を眼下にして、眺めはよいが、蚊にブン、ブン攻められてゆっくりともできない有様である。

こんなきびしい生活の中にも大島の海はたいへん美しく、水中めがねをつけてもぐると、原色の美しい魚が泳いでいたりして、心をいやしてくれた。少年たちも魚をつったり泳いだり思い思い

に、海の上さを満喫した。無人島の生活をとおして、感想や保護者の意見を聞いたが、その中に少年の、「頭だけの勉強だけではだめだ」とか、「自分の好き勝手はできない」「何もないところから作り出す喜びを知った」「母親のありがたさがわかった」など自分の体で感じとったすばらしい体験談があった。

保護者は、現在の学校生活や、家庭での生活は充実しているように思うけれども、何か足りないという疑問があって無人島のつどいに参加させたが、きびしい自然の中で生活したことが、結果的に少年の日々の生活態度の中に力強いものを感じるようになったという意見が多く見られた。少年の中にも、自分が苦しいことに合って負けそうになったら無人島の生活を思い出すといったものもいた。

島を離れるとき涙を浮かべていた女の子、力強く来年もまた来るぞと叫んだ男の子、みんなもつと無人島の生活をしたかったにちがいない。大人と子どもが心を合わせて挑戦した無人島の生活、洞くつで寝たこと、山小屋をつくって寝たことなど、いろいろの思い出を残して終了したわけである。今後とも、近隣の仲間集団のよさがほとんど見られなくなった現在、このような催しをもっとふやして少年たちの日々の生活に体験的に刺激を与えたいものである。

(国立室戸少年自然の家)